

〈巻頭言〉

実物資料と他分野の知，二つの刺戟

複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム代表

石川 日出志

ひそかに私は、根っからの考古学者だと思っている。

私が尊敬するHさん（長年の学恩があるからこそ「先生」とは言わない）は、西日本出身ながら1970年代から関東の研究機関で活躍してきた。根っからの考古学者として私に言う。「石川さん、私たちは20世紀の考古学者だねえ」と。それは、私にとっては幸せな褒め言葉である。そのHさんは、私が学び育ち、研究の場としてきた明治大学に対しては、相当に批判的な意見を重ねてきた。私より12歳年長なので経験も、学んだ時代・社会環境も相当に異なるし、当然のこと、考古学者としての歩みも蓄積も実践もとうてい比較にはならない。それでも、資料に徹底して向きあう姿勢を尊敬しつつも、しかしかなり異なる考え方をしてきた。学界の論争レベルの異論を闘わせたこともある。だからこそ、数年来「20世紀の考古学者」というレッテルは、けっこう気に入っている。

自らを「根っからの考古者」と思う理由は、土器・石器・青銅器・住居跡など、ナマの考古資料にじかに触れながら観察してあれこれ考え、それまでの考えを点検しつつ疑い、ときには大きく舵を切る、その面白さから、どうしても逃れられないからである。

日本の考古学界は、戦前の皇国史観の呪縛・制約から戦後に解放され、1950～60年代に各時代の議論の枠組みが構築された。しかし、開発事業に伴う遺跡の発掘調査の体制が整備される1970年代から発掘調査データの質・量が飛躍的に増すこととなり、その新出資料をもとに1980年代以後、議論の枠組みの再構成が進んだ。そこには、つねに実物資料との格闘があった。

ところが、戦後の研究を牽引した第1・第2世代の研究者が退いた20世紀末から、資料に即した研究と説明・解釈を重視した研究と、研究趣向が二極分化しつつあるように感じる。もちろん両者は相補的であるはずである。Hさんのいう「20世紀の考古学者」とは、徹底して資料に向き合いながら自らの考えを検証し、苦悩し、再構築する姿勢を言っている。それまでの説明・解釈・理論の枠組みで諸資料を考えるのではなく、ナマ資料自体と格闘しながら、むしろ従前の学説や枠組みを疑うことを指している。

その際にもっとも重要なのは、ナマの資料からどれだけ情報を引き出せるかである。ナマの資料から、それがもつ情報をきちんとえり分けて獲得して、それまでの思考を補強し、あるいは再編しえるかを考える。その力が、近年弱くなっているのではないかと感じることもある。モノを見る力を養うのに近道はない。20代のうちに徹底して資料と格闘することである。

Hさんよりも若く、これまた私と考え方・方法論がかなり異なるある年長の友人から、「石川さんは土器をみてるようけど、僕は型式を見る」と言い放たれたことがある。ここでいう「型式」とは土器型式を指し、先史時代の土器が地域ごと、時期ごとのまとまりと違いがあり、それを見極めると、それら土器をつくり使った人々の歴史を読み解くことが可能になる。しかし、私は全国各地の、主に弥生土器を観察するが、思い通りの論理・ストーリーで理解することなどなかなかできない。人間がつくったものだから、そうそう論理的には読み解けないのが当然だと思うことにしている。しかし、そうして観察を重ねていると、ある時、ことの次第がすすると読み解けることがある。そこに至るまで長い蓄積を要する場合もあるし、意外に早く気付くこともある。ただ、確かなのは、実物資料と格闘しなければ何も生まれない、ということである。だから実物資料を見続ける。

私は考古学者だが、考古学だけを学ぶのでは知らず知らずのうちに視野狭窄になるだろうと思い、様々な分野の知を齧るよう心掛けている。・・・それは、単に現実逃避である場合もないとはいえないのだけれど。・・・考古学者として上記のような感覚をもっているが、いろんな学問分野の方の経験談を齧ってみると、様々な分野でも同様のことが語られるのに気付く。もちろん、そのほとんどは初歩的・入門的なものに限られる。しかし、文庫・新書・選書レベルでも、様々な現象を読み解く方法や視角に新鮮さを覚え、そして自らの考古学の思考法を組み替えた方がいいと感じることがある。すぐには実践はできそうにないが、その蓄積はそのうち専門性にも生きてくるであろうと信じている。

そう。実物と格闘するなかから得る刺戟、そして自分の専門性とは異なる世界に触れる中で得る刺戟、この二つの刺戟は、これからの私を育む些細な、しかしとても大事な糸口だと思う。